

教 育 研 究 業 績 書		
2025 年 4 月 1 日		
氏 名 加 藤 晴 美		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
経営学、労働経済学	秘書学、ビジネスマナー	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例		
① 「秘書科プロジェクト」における実践的指導	2010～2019 年 2015～2018 年 他	プール学院短期大学秘書科1年次生を対象に、地域連携を重視した活動、学生自身の可能性を見つけるプロジェクトを展開。（数名の教員で協力して担当） プール学院短期大学が位置していた堺の地場産業である線香の老舗店と連携し、学生が仮想の会社を設立し商品の企画・生産・販売までを行う活動を支援した。 農家の指導を受けながら無農薬の米作りを行い、それを使った献立を考え調理し尽力くださった農家の方々をもてなす取り組みを行った。 「茶道体験」として茶道や和のマナーを解説・指導し、学生が茶道を知り楽しむ機会を提供した。 「富士登山」に挑戦する学生と共に登山の基礎を学び引率を行った。
② 学生の国際交流機会を提供	2013～2017 年	プール学院大学に来訪したカナダからの留学生に対し、日本の文化を紹介する「Japanese Culture」の授業を行った。留学生とプール学院短期大学秘書科の学生が、茶道、浴衣の着付け、折り紙やかかるた等を通じて交流する機会を提供した。
2 作成した教科書、教材		
① 『ビジネスとオフィスワーク実務演習』 樹村房	2005 年 1 月 17 日	学生時代に学ぶべきオフィスワークの基本を、ビジネスマインドを根底に置きながら、現状に即した事例を取り入れて分かりやすく説明している。 担当部分は「第Ⅱ 接客応対」で、内容は、立ち居振る舞い、敬語の基本、来客応対の基本、電話応対の基本など。演習しながら実践的に学べるよう構成している。（担当頁 pp.13-32） 執筆者：水原道子、植竹由美子、加藤晴美、荻野正美、桐木陽子、児島尚子、野坂純子、森山廣美、山野邦子

②『ビジネスとオフィスワーク』樹村房	2012年3月30日	時代の変化による新しい動きや言葉を組み入れ構成され、ビジネスの場で求められる基本的な知識や技能を学べる内容となっている。 担当部分は「第Ⅰ部 接遇編 第3章 電話応対」。電話応対において注意するポイントを押さえながら、演習に重点を置いて実践的に身につけられるように構成した。(担当頁 pp. 49-60) 執筆者：水原道子、上田知美、加藤晴美、苅野正美、串田敏美、兒島尚子、小林清美、野坂純子、宮田篤、森山廣美
③『「きく・話す」教育指導法セミナー 授業進行マニュアル』日本ビジネス実務学会	2013年2月24日	日本ビジネス実務学会 2010 年度受託研究の成果を踏まえ、2011 年度受託研究として「きく・話す・話し合う」教育技法を研究した。そして、指導者対象セミナー開催に向けて準備を進め、教授法・教材を開発して授業用テキストを完成した。 1～5回「きく」、6～10回「話す」、11～14回「話し合う」、そして、15回は『「きく・話す・話し合う」を振り返る」とした。 (日本ビジネス実務学会 2011 年度受託研究) (担当頁 1-1～7、6-1～8、15-1～6) 執筆者：油谷純子、中川伸子、仁平章子、服部美樹子、福井愛美、加藤晴美
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
学生による授業評価 (プール学院短期大学)	2016年8月30日	高評価により表彰
4 実務の経験を有する者についての特記事項	なし	
5 その他	なし	
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 資格、免許		
①秘書技能検定試験 1 級	1996 年 7 月	主催：財団法人実務技能検定協会
②秘書教育担当者認定証 (第 6-0126 号) 取得	1996 年 10 月	主催：秘書教育全国協議会
③プレゼンテーション教育指導 法セミナー (第 02-03-07-005 号) 修了	2003 年 8 月	主催：日本ビジネス実務学会
④精神保健福祉士資格 取得	2022 年 3 月	
⑤介護職員初任者研修課程 修了	2022 年 7 月	
2 特許等	なし	
3 実務の経験を有する者についての特記事項	なし	
4 その他	なし	

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 『国際堺学を学ぶ人のために』	共著	2013年 12月	世界思想社	本書は、堺を古代から現代まで俯瞰し、その歴史や文化を深く知り、産業、経済、教育などの現状を分析することで堺の発展に寄与するべく著された。 担当箇所は「第2章4. 千利休と堺」。茶道の歴史と堺に生まれた千利休の生涯をたどった。そして、どのようにして利休が茶道を大成させたか、また、特に堺の繁栄・衰退の中にあった町衆と茶道の関わりについて注目し解説した。 (担当箇所 第2章 堺の歴史と文化 4. 千利休と堺 pp.133-146) 著作者：木村一信、西尾宣明、加藤晴美他
(学術論文) 1 秘書業務とオフィス環境－近畿圏企業の実態調査－	共著	1998年 12月	プール学院大学研究紀要 第38号 pp.161～174	本研究は、経営環境の激変する中で「秘書業務」や「秘書部門」がどのような影響を受けているかを明らかにし、今後の秘書業務のあり方を探り、秘書教育の向上に資することを目的とした。 秘書に求められるパーソナリティや能力はこれまでと変わらなかったが、コンピュータなどの導入による業務内容の著しい変化が認められた。また「秘書のあり方」については、男女同一化、二極分化、契約秘書などの変化の兆しが見られた。(担当頁 pp.162～166) 著作者：中村英美子、横山秀世、加藤晴美、苅野正美
2 秘書科卒業生の動向調査－職業と仕事の経歴を中心に－	共著	2002年 12月	プール学院大学研究紀要 第42号 pp.73～91	プール学院短期大学秘書科の卒業生にアンケートを行い、卒業後の職業、キャリア形成・プランなどについて尋ねた。 再就職に意欲的な卒業生が顕著で、短期大学の教育は2年間完結型ではなく、高等教育の第1ステージとして、生涯教育または継続教育の視点が必要であることが分かった。そのためには、再就職支援を含む長期的なキャリアプランを可能にする柔軟な教育プログラムの必要性が示唆された。(担当頁 pp.77～80) 著作者：中村英美子、横山秀世、苅野正美、加藤晴美
3 秘書実務教育における検定試験の成果と課題－ワープロ検定試験を中心に－	共著	2003年 12月	プール学院大学研究紀要 第43号 pp.127～142	現在のコンピュータによる文書作成技能教育に至るまでの、プール学院短期大学秘書科の実務教育の成果を物語るものの一つとして、検定試験の実施状況を跡づけた。そして、検定試験が秘書教育において果たしてきた役割と問題点を明らかにし、検定試験の効果的・有機的利用

				法について検討することを目的とした。 検定試験受験のプロセスは学生たちの自信となり、更なる向上心へとつながる動機付けとなっていた。(担当頁 pp. 127～132、pp. 134～139) 著作者：横山秀世、加藤晴美
(研究ノート)				
1 秘書と秘書教育に関する一考察	単著	1996年 12月	プール学院 大学研究紀 要 第 36 号 pp. 363～ 379	秘書とは何か。秘書教育が目指してきたものは何かを考察した。 まず、日本における「秘書」の言葉の解釈や職業としての捉えられ方を列挙し、さらに日米の秘書の違いを比較した。次に研究対象としての「秘書」を明らかにし、その専門性について言及した。そして、教育によって秘書を専門的職業として位置づけ、さらに教育（秘書教育）を組織人全体に行うことによって有効な組織作りが可能であるとした。
2 秘書教育の必要性	単著	1997年 12月	プール学院 大学研究紀 要 第 39 号 pp. 387～ 398	秘書教育の目的は、さまざまな環境の中でよりよい結果を生み出すための望ましい言動を選択し、実践できる力（高度な実践能力）を養うことである。そして、その能力は秘書に必ず求められるものであるが、同じく全ての組織人にも必要であることを明らかにした。 秘書教育の成果は、習得した実務によって他者とコミュニケーションを図り、いかによりよい人間関係を築けるかということに表れることから、秘書教育は組織人全体に必要であると考えた。
3 秘書教育におけるジェンダー・バイアスに関する一考察	単著	1999年 12月	プール学院 大学研究紀 要 第 39 号 pp. 387～ 398	秘書教育はすべての組織人に有用な教育であるが、対象は女性中心で「秘書＝女性」を前提としていた。そのため、秘書職（秘書的な働き）は女性にふさわしいというジェンダー・バイアスを強調する結果を導いた。 本稿では、ジェンダーにとらわれない秘書の働きを理解し、秘書教育が果たす役割を再確認し、ジェンダー・フリーな秘書教育を行うことの意義を主張した。更に、秘書教育は能動的に長期的キャリア形成を可能にする教育だとした。
4 茶道の歴史－男性から女性へ－	単著	2004年 12月	プール学院 大学研究紀 要 第 44 号 pp. 203～ 214	来客応対の一連の作業、動き、心構えは、茶会と同じである。よって、茶道の精神や教えを秘書・ビジネス教育に生かし、自然や人と調和しながら役割を果たす組織人を育てられると考えた。 そこで、本稿では茶道の歴史をたどり、その根底にあるものを明らかにすることを目的とした。そして、男性中心に受け継がれてきた茶道が、いつどのようにな女性の趣味や礼儀作法の稽古とイメージされるようになったのかを探った。
5 女子教育と茶道－明治期の展開－	単著	2007年 12月	プール学院 大学研究紀	かつて茶道は男性を中心に盛んに展開されていた。修行や嗜み、ステータスと

			要 第 47 号 pp. 266～ 272	して位置づけられ、時には政治的取引にも利用されていたのである。しかし、明治維新を迎えそのメリットが薄れると、男性には重んじられなくなっていた。そこで、茶道人口を増やす努力として、女子への茶道教育が盛んになった。 本稿では、茶道が男性から女性中心となっていった経緯を明治期の女子教育を中心に辿り、その中での位置づけの変遷を探った。
(報告書)				
1 秘書科卒業生のライフコースに関する研究－本学卒業生 1 期生から 22 期生を対象に－	共著	2008年 3月	2006・2007 年度プール学院大学短期大学部奨励研究助成	短大秘書科の卒業生がどのような職業・キャリアを選択しているか、そして、職業と家庭との両立、キャリアプランの実践などを調査することで、秘書科卒業生のライフコース選択の要因を明らかにしたいと考えた。 1～22 期生にアンケートを行い、卒業後の進路・経歴、初職と現職、本学への進路選択の理由や在学中の生活、就職支援やライフコースについての考え方などについて尋ね、その結果をまとめた。 (担当頁 pp. 8～24、pp. 51-52、pp. 76-96) 著作者：小西俊二郎、苅野正美、加藤晴美
2 日本ビジネス実務学会 平成 22 年度 教育技法受託研究「きく・話す」能力の教育方法－社会人基礎力を中心として－	共著	2011年 6月	日本ビジネス実務学会近畿ブロック教育技法受託研究チーム	高等教育卒業生が備えるべき「きく・話す」能力は何かを明確にし、それらの能力を獲得するための効果的な教育方法を検討し、その教育を実現するシラバスを構築すべく研究を進めた。 まず、現在、大学・短大で開講されているビジネス関連科目における「きく・話す」能力要件を抽出した。その後、企業に対してコミュニケーション基礎力に関する調査を実施し、その結果を踏まえて、モデルカリキュラムを構築した。 (担当頁 pp. 32-36) 著作者：油谷純子、有働壽恵、中川伸子、仁平章子、服部美樹子、福井愛美、加藤晴美
「学会発表」				
1 秘書科卒業生の動向調査－職業と仕事の経歴を中心に－	共同	2002年 6月	日本ビジネス実務学会第 21 回全国大会	18 歳人口の減少、四年制大学志向、入学者の目的の多様化、就職難など、短期大学を取り巻く環境は厳しい。そこで、プール学院短期大学秘書科の卒業生にアンケートを行いキャリア形成・プランなどを尋ねた。 その結果、短期大学教育は生涯教育・継続教育の視点が必要であることが分かった。そして、再就職支援を含む長期的なキャリアプランを可能にする柔軟な教育プログラムの必要性が示唆された。 共同研究者：中村英美子、横山秀世、苅野正美、加藤晴美

2	秘書科卒業生のライフコースに関する研究－本学卒業生を対象とした調査から－	共同	2008年 2月	日本ビジネス実務学会第40回近畿ブロック研究会	プール学院短期大学秘書科卒業生のライフコース選択要因を明らかにするために、1～22期生に対して行った調査結果の一部を報告した。 卒業後は93%が就職し、それを継続していた者がもっとも多かった(29%)。また、しかし、一時就業を中断して再就職した者の43%がパートやアルバイトであった。 実務教育や就職課の職員との相談やガイダンスを高く評価し、本学入学は満足度が高かったことが確認できた。 共同研究者：小西俊二郎、苅野正美、加藤晴美
3	「きく・話す」能力の教育技法－社会人基礎力を中心として－(中間報告)	共同	2008年 2月	日本ビジネス実務学会第45回近畿ブロック研究会	高等教育卒業生が備えるべき「きく・話す」能力は何かを明確にし、それらの能力を獲得するための効果的な教育方法を検討し、その教育を実現するシラバスを構築すべく研究を進めた。 まず、現在、大学・短大で開講されているビジネス関連科目における「きく・話す」能力の要件を抽出した。その後、企業に対してコミュニケーション基礎力に関する調査を実施し、これらの結果を踏まえて、モデルカリキュラムを構築した。(日本ビジネス実務学会平成22年度受託研究) 共同研究者：油谷純子、有働壽恵、中川伸子、仁平章子、服部美樹子、福井愛美、加藤晴美
4	「きく・話す」能力の教育技法－社会人基礎力を中心として－	共同	2011年 6月	日本ビジネス実務学会第30回記念全国大会	日本ビジネス実務学会第45回近畿ブロック研究会において、中間報告をした研究を完成させた。 「社会生活に必要な言葉による伝えあう能力」「互いの立場を尊重しつつ、ことばで通じあう力」の育成に着目し、モデルカリキュラムの詳細を検討した。そして、「きく」を「聞く・聴く・訊く」の意味を含んだ能動的・創造的なものと捉え、思考力や批判力を高めたうえで「きく・話す」力を養い、「伝えあう力」の向上を諮る必要があるとした。 (日本ビジネス実務学会平成22年度受託研究) 共同研究者：油谷純子、有働壽恵、中川伸子、仁平章子、服部美樹子、福井愛美、加藤晴美